

Title	持続可能な地域の実現に向けた観光・交流活動の戦略的活用に関する仮説の提案：北海道黒松内町の地域振興プロセスを事例に
Author(s)	森重, 昌之; 敷田, 麻実
Citation	日本観光研究学会全国大会学術論文集, 22: 361-362
Issue Date	2007-12
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16833
Rights	本著作物は日本観光研究学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Institute of Tourism Research. Copyright (C) 2007 日本観光研究学会. 森重昌之, 敷田麻実, 第22回日本観光研究学会全国大会学術論文集, 2007, pp.361-362.
Description	

持続可能な地域の実現に向けた観光・交流活動の戦略的活用に関する仮説の提案

—北海道黒松内町の地域振興プロセスを事例に—

Strategic Approach for the Sustainable Region by Utilizing Tourism

森重 昌之* 敷田 麻実**

MORISHIGE, Masayuki SHIKIDA, Asami

キーワード：地域マネジメント、地域戦略、エンパワーメント、持続可能性

1. はじめに

地域振興について考える際、「持続可能性」はいまや最も基本的な概念の1つであるが、農山漁村や中山間地域のような都市以外の地域では、過疎化・高齢化の進行や地域経済の衰退などにより、「持続可能な地域戦略」が見出せない状況にある。都市の場合は「creative class(創造階級)」のような創造的な人々が集まり¹⁾、ダイナミックな地域振興が期待できる。ところが都市以外の地域では、こうした創造階級の集積は難しく、彼らの持つ知識やノウハウの活用は期待しにくい。

しかし1980年代以降、マストツーリズムに代わって地域資源に新たな付加価値を見出す観光として、グリーンツーリズムやエコツーリズムなどが脚光を浴びるようになった。地域がこれらの観光を「地域活動に参加するためのツール」として戦略的に活用することができれば、彼らの知識やノウハウを活用した持続可能な地域振興の実現が期待できる。

そこで本研究では、北海道黒松内町の地域振興プロセスを事例に、来訪者(観光客、移住者など)を活用し、地域が自律しながら観光にも依存するという「自律的な依存」戦略を提案することを目的とする。なお黒松内町の地域振興プロセスの詳細については、敷田・森重(2003)を参照願いたい²⁾。

2. 地域資源の魅力を引き出す地域戦略の策定

黒松内町は北海道南西部、札幌市と函館市のほぼ中間に位置する人口3,457人(2005年国勢調査)、面積345.47km²の酪農と福祉を中心とした地域である。黒松内町では地域戦略として、北限のブナ林である「歌オブナ林」をシンボルとし、農村風景の創造と都市との交流を促進する体験型・滞在型のふるさとづくりをめざす

「ブナ北限の里づくり構想」を1987年に策定した。この戦略には、都市との交流を促進するために地域資源であるブナ林を効果的に活用するという特徴がある。

地域は自然環境や景観、食、生活文化など何らかの地域資源を持つ。たとえユニークな資源がないと考えている地域でも、その地域の歴史性や物語性を加えることで、魅力を持った固有の地域資源にできる。黒松内町ではそれを積極的に活用し、地域資源を見直す「学習」プロセスの創出や地域のアイデンティティの醸成を図り、さらに地域住民や来訪者も含めて「地域が何をめざすのか」という姿(ビジョン)を明確にした。

その後、黒松内町では「ブナ北限の里づくり構想」を具現化するため、1990年代前半を中心に宿泊施設や展示学習施設、特産物手作り加工センターなど、ハード面での観光客の受入れ体制の整備を進めた。

3. 観光客の変容と地域との関係性強化

そして1990年代中頃から、黒松内町では整備した施設を用いた観光客の誘致や地域での雇用創出に重点を移している。この時期の観光入込み客数は、1993年度の4.6万人から2000年度には18.3万人と急増している(2005年度は14.0万人)。ただし観光客の増加だけでなく、地域戦略に基づいて町内で活動する来訪者の支援も行われた。例えば黒松内町の事象についての研究者支援のため、1996年から「自然科学奨励事業」を始めたほか、1998年には来訪者が自然環境にかかわる体験学習のプログラム開発や人材育成を図るための活動拠点(ぶなの森自然学校)として、廃校を提供している。

これらの活動と合わせるように、来訪者が持つ知識やノウハウが町内で「開示」されていった。例えば前述の自然科学奨励事業では、研究者の成果を町民に公開

*北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻博士後期課程

**北海道大学観光学高等研究センター

する講演会が開かれているほか、ぶなの森自然学校にも地域との「関係性構築」をめざす人材が集まっている。またブナ林で自然観察会などを開催するリピーターのネットワークを通じて、1993年には「国際ブナフォーラム」が開催されている³⁾。このように来訪者だけでなく、彼らの持つネットワークから黒松内町でさまざまな知識やノウハウが取り入れられるようになった。

こうして来訪者が町内の地域活動にかかわる機会が増えたほか、「ブナ北限の里づくり構想」に共感した来訪者が移住し、ミネラルウォーターや豆腐、塩、釣竿づくりなどで次々と起業している⁴⁾。この結果、地域戦略を策定して以来、黒松内町の都市部からの移住者は20家族を超えたほか、空き家のデータベース化やお試し移住体験ハウスの整備などを進めており、2006年度も新たに6家族15人が町民に加わっている⁵⁾。

4. 観光・交流活動の戦略的活用の可能性

黒松内町の地域振興プロセスを踏まえ、持続可能な地域の実現に向けた観光・交流活動の戦略的活用プロセスは次のように整理できる。

①地域戦略の策定

地域がめざすべき方向やビジョンを明確に示した地域戦略を策定する。「地域が観光・交流活動を通じて何をめざしているのか」を明示することで、地域が来訪者を受け入れるための基準を明確にでき、自律的な地域マネジメントが可能になる。

②来訪者の受入れ体制の整備

地域戦略だけでは、来訪者にビジョンを伝えることが難しい。来訪者に地域のビジョンや資源の魅力をわかりやすく伝え、地域活動への参加の「きっかけ」をつくるために、必要に応じて受入れ施設を整備する。

③地域内での来訪者の活動支援

観光客が地域のビジョンや資源に魅力を感じると、繰り返し地域を訪れる可能性が出てくる。そこで観光・交流活動を契機に、来訪者が地域内で活動するための支援を行い、地域活動への参加度合いを高めていく。黒松内町の場合は、リピーターが行う自然観察会や研究活動、自然学校の開校に対する支援が行われた。

④かかわりの深化による創発

来訪者が観光・交流活動だけでなく、地域内でさまざまな活動にかかわることで、地域とのネットワークが形成され、地域において来訪者の持つ知識やノウハウの蓄積、地域振興に向けた創発的な知識創造、新た

な活動展開が期待できる。これは来訪者がリピーターから二地域居住、さらには移住へと変容することで滞在時間が長くなる。そして地域活動にかかわる時間や範囲が広がり、相対的關係を通じた地域のエンパワメントが起こり、地域振興に結びつくと考えられる。

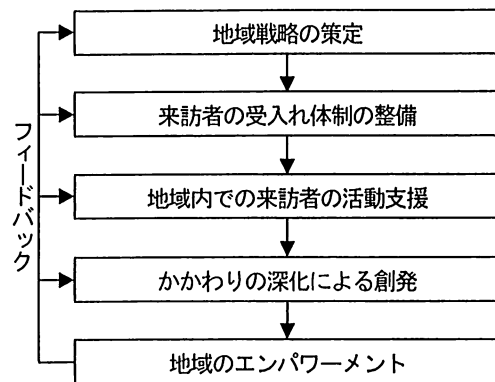


図-1 観光・交流活動の戦略的活用のプロセス

5. おわりに

都市以外の地域における観光では、これまで経済活性化や交流人口の増加をめざす傾向が強かった。しかし本研究では、地域振興プロセスへの「参加ツール」として観光・交流活動を捉え、来訪者と地域住民の創発的な知識創造による地域振興の可能性を示した。

近年、人々が持つ知識に着目した「創造都市論」が脚光を浴びているが、観光・交流活動を戦略的に活用すれば、都市以外の地域でも「自律的依存」戦略による地域振興の青写真を描くことができる。そのためには地域戦略を策定し、地域資源やそこで暮らす「人」の魅力を高めることで来訪者を呼び込む必要がある。これは地域住民と来訪者による地域のエンパワメントが持続可能な地域振興を実現するという、創造階級の集積の少ない都市部以外の地域戦略のモデルである。そこに観光の新たな役割が見えてくるであろう。

【参考文献】

- 1) Florida, R. (2002) : The Rise of the Creative Class, Basic Books
- 2) 敷田麻実・森重昌之(2003) : 公共事業の戦略的活用と地域の環境保全—北海道黒松内町における持続可能な地域振興と政策プロセスの検証, 環境経済・政策学会年報, 8, pp.121-138.
- 3) 「北限のブナ林」北海道遺産選定記念事業実行委員会(2006) : ブナ林思い出の集い報告書—5人が語る「ブナ林の魅力とまちづくりの歴史」
- 4) 黒松内町役場(2006) : 黒松内町3村合併50周年記念誌(本編)
- 5) 黒松内町役場(2007) : 広報くろまつない平成19年4月号